様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2021～2022
課題番号：２１Ｋ１９９８３

研究課題名（和文）20世紀フランス文学におけるモデルニテ：ミラン・クンデラの小説理念の解明に向けて

研究課題名（英文）Modernity in the 20th-century French literature : to clarify the philosophy of novel of Milan Kundera

研究代表者
篠原　学（SHINOHARA, Manabu）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・講師

研究者番号：９０９０５９７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、チェコ出身のフランス語作家ミラン・クンデラ（1929年-）の文学論、とくに小説をめぐる思索のなかに、19世紀後半から20世紀前半にかけてのフランス文学の展開を特徴付けているモデルニテ（近代性）の意識が見て取れることに着目し、クンデラの小説理念を解明しようとしたものである。モデルニテは新しい表現形式の追求であると同時に、近代的であろうとする芸術家の態度でもある。しかしクンデラの見方では、今日、近代は危機に瀕しており、新しいことと近代的であることは両立しない。そのことがクンデラの小説理念を両義的なものにしていることが、明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は、亡命作家の異文化適応のモデルを示すものであり、自己のものとは異なる言語圏や文化圏の芸術・文学に通じていることが、独自の創造につながった例を提示している。このことは、グローバル化が進む社会における他者理解に、人文学的な素養が今後ますます必要になることを物語っている。
また、本研究の成果は、小説という文学形式が近代ヨーロッパを支える基本的な諸価値を体現していることを示してもいる。現代世界の成り立ちを知るうえでは、小説に学ぶべきことが多々あるということである。

研究成果の概要（英文）：This research attempts to clarify the philosophy of novel of Milan Kundera, Czech novelist writing in French born in 1929, by focusing on his literary theory, especially on his speculations about novel, in which we can see the awareness of modernity that has characterized the French literature in the late 19th and early 20th centuries. Modernity is the pursuit of a new form of expression, as well as an artist's attitude of trying to be modern. However, in Kundera's view, modernity is in crisis today, and therefore, being new and being modern are incompatible. This shows that Kundera's philosophy of novel is ambivalent.

研究分野：20世紀フランス文学

キーワード：ミラン・クンデラ　小説芸術　近代ヨーロッパ　モデルニテ　モダニズム文学　作品制作

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
（１）ミラン・クンデラ（1929 年-）は現代ヨーロッパを代表する小説家の一人であり、フランスを中心として世界各国でその作品の研究が行われている。日本でも、フランス文学研究者西永良成によって早くから著作の翻訳・紹介が進められ、現代フランス文学の領域における主要な研究対象としての地位を確立している。そのアプローチには多様なものがあるが、文学史的な位置付けに関しては、クンデラ自身が 18 世紀フランス文学とのつながりを強調し、また 20 世紀においてはカフカやムージル、ブロッホといった中央ヨーロッパの作家の系譜中に自らを位置付けようとしていることから、19 世紀から今日に至るまでのフランス文学の展開のなかでクンデラの作品を捉えようとする研究はあまりなされてこなかった。

（２）クンデラの文学論の核をなしている小説理念と作品におけるその表れをめぐっては、これまでに多くの研究が蓄積されてきた。それらの研究では、クンデラの小説理念はその独自性が強調される一方で、過去の作家・作品との接点は十分に明確にされてこなかった。しかし本研究の代表者、篠原は、クンデラの小説理念の根底に、19 世紀以降のフランス文学の展開を特徴付けるモデルニテ（近代性）の意識が伏在していることに、かねてより着目していた。モデルニテについては、フランスの文学研究者アントワーヌ・コンパニョンが『アンチモダン―反近代の精神史』（原著 2005 年、邦訳 2012 年）（文献①）を著し、近代的諸価値への反発という観点からフランス文学史を記述する可能性を提示してみせていた。この議論の延長上にクンデラを置くことで、これまではあまり注目されることのなかった、19 世紀以降のフランス文学のなかのクンデラの位置付けとその重要性が明らかになるのではないかと期待された。

２．研究の目的
（１）本研究の目的は、クンデラの文学論をモデルニテという観点から捉え直すことで、クンデラが小説という形式に代表させている文学的理念が、19 世紀以降のフランス文学の展開と接点を持っていることを示すことにあった。小説を自立した文学形式として語るクンデラは、文学および芸術上の諸形式が各々に固有の表現を追求していった 20 世紀前半のモダニズムの試みを反復しているように見える。モダニズムに対するこのような時代を超越した志向から、クンデラの文学的創造の根幹に関わる運動を取り出すことで、フランス文学におけるモデルニテの系譜のなかにクンデラを位置付けることが目指された。

（２）クンデラはチェコからフランスに亡命した作家であり、先行研究では、亡命文学の文脈で語られることも多い。この文脈において、クンデラがフランス文学の実践者であることの意味を考えるさいには、クンデラがフランス文学に対して外から向けるまなざしを捉えることが重要になる。このような視座に立ち、作家のモデルニテへの意識を軸としてクンデラをフランス文学史のなかに新たに位置付け直すことで、異なる文学的伝統に根差して創作を継続しようとする亡命作家の肖像を描くことが、本研究のもう一つの目的であった。

３．研究の方法
（１）方法において本研究の中心をなしたのは、クンデラのテクストの緻密な分析である。とくに、フランスへの亡命後、1980 年代から 1990 年代にかけて書かれたクンデラのエッセイにどのような小説理念が表れており、その背後に、モデルニテに対する作家のどのような意識があるのかを明らかにしようとした。そのさい、作家が自説を整合的に展開しているエッセイにのみ依拠するのではなく、同時期に書かれた小説作品も視野に入れることで、エッセイによる理念の提示と小説制作とのたえざる往復運動のなかで、モデルニテに対する意識の、作家自身にも完全には統御されていなかったであろう湧出の様態を捉えることに努めた。

（２）本研究においては、クンデラの小説理念をそこに位置付けるべき、フランス文学におけるモデルニテの系譜を記述する必要があった。とくに、20 世紀前半のモダニズムの時期の作家たちの関心をモデルニテの観点からあらかじめ整理しておくことは、本研究の理論上の前提をなしていた。そこで、コンパニョンをはじめとするモデルニテないし近代に関する基礎研究を参照し、モデルニテの観点から文学的な事象を考察するための理論的な枠組みを整備することに注力した。

４．研究成果
（１）研究代表者の単著論文「小説と政治的なもの―ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』を再読する―」（2022 年 3 月）は、1984 年の小説『存在の耐えられない軽さ』を発表当時の文学と社会の状況において再読する試みである。本論文の後半で、筆者はこの小説とショデルロ・ド・ラクロの小説『危険な関係』とを対比する考察を行っている。筆者が着目したのは、ラクロの小説の登場人物（メルトゥイユ侯爵夫人）においては恋愛関係を通じて可能になると考え

られている自己への排他的支配が、『存在の耐えられない軽さ』の登場人物（トマーシュ）においては不可能になっている、ということである。かりに、自己への排他的支配にもとづく自己決定が近代的な人間観に特有のものであるならば、この対比が物語っているのは、クンデラの小説の舞台背景には、近代的な価値観の危機がある、ということにほかならない。概略このような議論によって、本研究は、クンデラの小説中に近代に対する問題意識が表れていることを明らかにした。

（２）続く単著論文「ミラン・クンデラの小説実践における近代」（2022 年 5 月）は、クンデラが近代に対して抱いている問題意識が、創作行為の次元においては、この作家をモダニズムに接近させていることを明らかにしたものである。1986 年の『小説の技法』において、クンデラは小説の起源を近代に求めるのだが、クンデラのいう「近代」とは、ルネッサンスを経て、絶対的な真理を保持する神が人間世界から退場した後の時代を意味している。それゆえ、クンデラの考えでは近代の精神を具現しているべき小説という形式において、その作者が神として現れることは回避されなくてはならない。小説の作者についてのこのような考え方は、1920 年代にアンドレ・ジッドが『贋金つくり』の登場人物エドゥアールの口を借りて展開した「純粋小説」論にその等価物を見出すことができる。エドゥアールにおいては、作者が完全には統御し得ないような仕方で小説を書くことが夢想されるのだが、そうした作品制作のあり方が根差していたものこそ、小説を芸術の一ジャンルとして純粋化し、作者の関与は最小限に留めて自立させようとしたモダニズム文学の潮流であった。1980 年代のクンデラがこの潮流に回帰していることを、モダニズムに関する吉田朋正の研究（文献②）も参照しつつ論証したのが本論文である。

（３）2022 年 9 月に渡仏し、パリの国立図書館で、日本では刊行されていないクンデラのテクスト数点を読み、画像データを取得した。この調査の結果明らかになったのは、近代に対するクンデラの志向は、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての音楽や絵画への愛着と切り離せないということであった。また、フェルナンド・アラバールについてのテクスト（文献③）では、小説はチェスになぞらえられていたが、そのチェスには規則がなく、規則を創出することなしには指すことができないとされていた。この特殊な遊戯の比喩は、クンデラにおける近代が創造性に関わるものであることを示していると思われたが、十分な論証を与えるには至らなかった。今後の研究のなかで改めて論証に取り組みたい。

（４）2023 年 2 月に行った単独の口頭発表「ミラン・クンデラにおける「近代」の再解釈」では、小説の歴史を語ることで「近代」を定義しようとするクンデラの振る舞いが、近代についてのハーバーマスの立場（文献④）を想起させることに着目した。ハーバーマス同様、クンデラは基本的には近代的諸価値に信頼を置いているのだが、小説作品のなかでは信頼が不安へと転じ、近代的諸価値は一転して戯画化される。本発表は、この転換のうちにモデルニテに対する引き裂かれた意識を読み取ることで、クンデラをコンパニョンの言う「アンチモダンとしてのモダン」の一人として捉えることのできる可能性を示したものである。発表では、クンデラの不安が、全体主義の時代を生きた亡命作家の経験に根差していることも示唆された。

（５）単著論文「民主主義と小説：ミラン・クンデラ『不滅』における顔のモチーフ」（2023 年 3 月）では、近代的民主主義の最も重要な理念の一つである「平等」が、小説『不滅』では人間の「顔」という形象を通じてグロテスクに戯画化されていることの意味を問うたものである。この小説における「顔」とは、人間がマス・メディアの体制によってしばしばそれへの還元の危機に晒される視覚的なイメージのことである。クンデラの見るところでは、現代におけるイメージの氾濫は、人間存在の忘却を推し進めてきた合理主義的近代の一つの帰結と見做されるものだが、クンデラはこのイメージの支配を、文学によって緩和しようとする。すなわち「見る」ことの専制に、小説を「読む」ことを対置しようとするのだが、クンデラにおいては、小説もまた合理主義と等しく近代の産物であることを考えれば、このような「見る」と「読む」の二極構造を提示することは、ともすれば合理主義的側面において批判されがちな近代を、別の面の強調により擁護することにほかならない。本論文は、イメージの支配に関するマリ=ジョゼ・モンザンの議論（文献⑤）を参照しつつ、クンデラにおけるこうした近代擁護の理路を浮かび上がらせるものであった。

（６）2023 年 3 月に行った単独の口頭発表「今日のフランス文学にみる家族史の現在」はクンデラを主題とするものではなかったが、議論のなかで、昨今のフランス文学に見られるオートフィクション的な想像力について、クンデラの小説理念と対比しつつ論じる箇所があった。クンデラはモダニズム的な関心にもとづいて、小説を自立した作品として提示することに腐心するのだが、制作という契機に重点を置くそうした方向性は、オートフィクション的な想像力においては退潮し、フィクションによっていかに真実を語るかという問題意識が顕著になってくる。もしこのような整理が可能であるならば、昨今のフランス文学におけるオートフィクションの隆盛

は、クンデラがその小説理念の足場とする「近代」が、一つの時代として終わりを迎えつつあることを示唆しているとも考えられる。クンデラにおいて独自に解釈された「近代」のこのような終焉を、少なくとも仮説として提示し得た点に、この発表の、本研究課題に対する寄与があった。

〈引用文献〉

① アントワーヌ・コンパニョン『アンチモダン―反近代の精神史』松澤和宏監訳／鎌田隆行／宮川朗子／永田道弘／宮代康丈訳、名古屋大学出版会、2012 年。
② 吉田朋正『エピソディカルな構造―〈小説〉的マニエリスムとヒューモアの概念』彩流社、2018 年。
③ Milan Kundera, “Postface : Hommage à Arrabal”, in Fernando Arrabal, Arrabalesques. Lettres à Julius Baltazar (1967-1993), Mortemart, Rougerie, 1993.（邦題：ミラン・クンデラ「あとがき―アラバールへのオマージュ」、フェルナンド・アラバール『アラバレスク―ジュリユス・バルタザールへの手紙（1967～1993 年）』）
④ J・ハーバーマス『近代―未完のプロジェクト』三島憲一訳、岩波現代文庫、2000 年。
⑤ マリ=ジョゼ・モンザン『イメージは殺すことができるか』澤田直／黒木秀房訳、法政大学出版局、2021 年。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 篠原 学	４．巻 2021
２．論文標題 ミラン・クンデラの小説実践における「近代」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト	６．最初と最後の頁 68～77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/88394	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 篠原 学	４．巻 62
２．論文標題 民主主義と小説：ミラン・クンデラ『不滅』における顔のモチーフ	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Gallia	６．最初と最後の頁 105～114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 篠原学	４．巻 48
２．論文標題 小説と政治的なものー『存在の耐えられない軽さ』を再読するー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 言語文化研究	６．最初と最後の頁 93，112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/87088	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 篠原 学
２．発表標題 ミラン・クンデラにおける「近代」の再解釈
３．学会等名 クンデラ研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 篠原 学
２．発表標題 今日のフランス文学にみる家族史の現在
３．学会等名 欧米言語文化学会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関